第３章　フリーハンドの総合学習
第２節　教育の「縦糸」と「横糸」

今回は、やや理屈っぽい話になります。総合学習に位置づけてはいますが、あらゆる教育活動に共通する問題です。

この節は、
■教育における「縦糸」と「横糸」■
■教育における「目的」と「手段」■
■「釈迦の掌」と「孫悟空」■
の３つの項から成ります。

■教育における「縦糸」と「横糸」■

「クラスのめあて」を教室に掲示したからといって、何かが変わるわけではない。大事なのは、めあてに向かっていかに歩を進めるかということだ。

織物に縦糸と横糸があるように、教育にも「縦糸」と「横糸」がある。教育における「縦糸」というのは、どんな学級集団を作るのかという理念である。「横糸」というのは、「縦糸」と織りなすことでイメージ通りの絵柄を描くに足りる教育実践である。「縦糸」は理念であり、現実には子どもたちのその時々の姿として私たちの前に現れる。その「縦糸」にマッチする「横糸」を用意し、織り上げていくのが私たち教師の仕事だ。私にとっての学級通信は、その際の大事な小道具である。

このように考えると、全教育活動において学級集団作りがかなりの位置を占める。それに費やす労力は決して小さくない。にもかかわらず、なぜ学級集団作りなのかと問われれば、子どもたちに安心して自己実現できる学びの場を提供したいからだと答える。読み・書き・計算といった学力が、自分のできなさや間違い

を隠し合う学級の中で育つとは考えられないからだ。学級集団作りは、学級担任である私の生命線だと思っている。

教科の学習においても同じことが言える。教科の本質、単元の目標、本時のねらいが「縦糸」にあたる。そして、どんな教材を使って、どんなしかけを作り、どんな活動を組むかということが「横糸」になる。

「縦糸」のない「横糸」だけの教育実践は、あたかも糸の切れた凧のようなものだ。ハウツーものを悪く言うつもりはないが、ハウツーはあくまでも「横糸」の一つに過ぎない。「横糸」をいくつ束ねても、織物にはならない。現実には、私たちの周りにはそうした実践が溢れているのだが。

■教育における「目的」と「手段」■

教育における「縦糸」と「横糸」の関係は、「目的」と「手段」と言い換えることもできる。

第１節「学級文化と集団づくり」で紹介した「しばてん」を例にとろう。

読みの授業のはじめに、次のように書いている。

> 一見これといった問題のない学級であったが、その平静さは、他人のことに無関心に生きることによって生まれる類のものに見えてきた。加えて、そこからくる自治能力の低さが、過度に教師に依存した集団の体質を醸していた。そこには隠然たる力の関係があって、その頂点に位置し、あるいは位置させられていた和也君や郁代さんという被差別部落出身児童への慢性的な服従と不満として燻っていた。当然にも、和也君や郁代さんにも集団への不信と不満があった。
>
> “なかまとかかわって生きる”ということはなかなかに難しい。日記指導とそれを一枚文集で集団に返すことに重点を置いてはいたが、一朝一夕に進むものではない。この子らの心に届くものを、集団を耕し育ててくれる教材をと考えて選んだのが「しばてん」だった。

外部に出した文章なので抽象的な表現になっているが、それが学級の実態だった。そうした実態を踏まえて、「この子らの心に届くものを、集団を耕し育てて

くれる教材をと考えて選んだのが「しばてん」だった。」というわけである。「子らの心に届く」「集団を耕す」ことが、「縦糸」であり、「目的」にあたる。「しばてん」は、「縦糸」と織りなすことでイメージ通りの絵柄を描くに足りる教材だと、私は考えた。そして、具体的展開部分の「文学の読み」「劇化」「版画集」は、「横糸」＝「手段」にあたる。

上の場面において、劇であればなんでもいいわけではなく、「しばてん」の劇であることに意味がある。演劇活動を行うことが重要なのではない。演劇を通して(演劇を「手段」として)、集団を耕すことが「目的」だ。

繰り返しになるが、教師にとっては、劇化は「目的」に迫るための「手段」である。子どもにとっては、劇を上手くやることが「目的」そのものである。ここを混同してはならない。

したがって、教師にとっての評価規準(検証軸)は、劇の出来栄えが何点かではなく、劇に取り組む中で集団がどう変容したかということでなければならない。

劇の例で言えば、取り組みに熱が入るほどに、教師にとっても劇が「目的」そのものになっていくことがある。やがて次の機会には、劇であればなんでもいいから上手くやれればいいと考えてしまう。――私は、これを「手段の目的化」とよんで戒めている。

「手段の目的化」現象は、毎日の授業の中で頻発している。

国語の研究授業で、要点の指導をする場面を考えてみよう。

授業の「ねらい」(「目的」)は、「段落の要点をまとめることができる」である。授業者は、そのねらいを達成する「手段」として、中心文を見つける、サイドラインを引く、ワークシートにまとめるなどの活動を考えた。ワークシートにも工夫を凝らし、キーワードをつないでいけば要点がまとめられるようにした。

そうして迎えた当日。授業はワークシートを仕上げたことをゴールとして終わった。

計画段階では、ワークシートは要点のまとめ方をマスターするための「手段」だった。しかし、実際の授業では、ワークシートを埋めることが「目的」に変わっていた。――「手段の目的化」とは、そういうことだ。

■「釈迦の掌」と「孫悟空」■

ドラえもんの映画に、「のび太のパラレル西遊記」(1988 年)という作品がある。その冒頭場面がおもしろい。のび太の扮する孫悟空が、如意棒と筋斗雲を手に入れ、世界を自由に飛び回っている。やがて、アップでのび太を映していたカメラがスーッと引いていく。のび太が自由に飛び回っていた世界はドラえもんの拳で、それを見つめるドラえもんが映し出される。釈迦の掌で踊る孫悟空の図だ。

この１シーンは、実に象徴的である。

総合的な学習の時間では、子どもの興味･関心で課題を設定したり、子どもが課題解決の方法を選択したりと、殊の外自主性や自由が強調される。ここで言う子どもの「自由」や「自主性」とは、どういうものだろう。額面通りに解釈したとして、一体どれほどの教室で学びが成立するのだろうか。

私は、子どもの「自由」や「自主性」は、基本的に先の映画ののび太の姿でいいと考えている。教師が舞台を用意し、しかけを作る。すぐれた舞台・しかけは、子どもに作為を感じさせずに学びの世界に連れて行く。そして、学びの主体として振る舞わせる。「釈迦の掌」はあくまでも黒子であるが、演出家の腕の見せ所だ。

「地域遺産はやま」に取り組んだ子どもが、学年末に綴った文章を紹介する。取り組みについては、第５節「地域学習としての総合学習」で取り上げる予定。ここでは子どもの達成感、自己効力感といった視点で読んでほしい。実を言うと、教師が引っ張りすぎた取り組みだったのだが…。

■國廣梨恵

私がこの１年間でがんばったこと、良くなった所は、人に伝えるということです。良くなったきっかけは、ＤＶＤです。ＤＶＤでは、吐山の地域遺産を自分たちが決め、しょうかいをしたり、皆ががんばって作った映画が内容になっています。地域遺産も映画もどちらもがんばったこと、気を付けたことがあります。それは、「人に伝える」ということです。これは、私にとって大きな試練だったと思います。理由は、人に伝えるのが苦手だからです。上手く伝えることができないからです。地域遺産では話してそれを録音するだけなのでまちがえなければいいですが、映画とくれば、演技で人に伝えなければいけないのでむずかしいと思いました。ですが、思いっきり役になりきろうと思いました。すると上手にできました。ＤＶＤは、今では 150 枚の注文が来ているそうです。私は、人に伝えられたかなと思いました。

「しろやま」№６３(2011.3.10)

■吉村清楓

私がこの１年間でがんばったこと、良くなったことは、地域遺産のＤＶＤを作ったことです。そのＤＶＤは、私たちが住む吐山のことがたくさんつまったＤＶＤです。吐山のスズランのことや、サンショウウオなど、たくさんの人にインタビューをしたり、実際に見に行って、写真におさめた物もＤＶＤの中に入れました。場面に合った台本を自分たちで考えたりもしました。私は、そこががんばったところだと思います。

それに、「雨たんもれや」の映画も作りました。これが一番大変でした。なぜなら、映画なので台本を覚えなくてはならないので、苦労しました。あと、演技も上手くなくてはならないので、私は悪戦苦闘しました。昔の人のようなしゃべり方がすごくむずかしかったです。何度も失敗を重ねながら、いい演技になっていきました。完成した作品を見ると、すごくいい作品になっていました。たくさんの人から注文が来て、私もうれしかったです。

「しろやま」№６５（2011.3.10）

子どもの綴った文章が、一人称の文章になっている。取り組みの中で子ども一人ひとりが活動の主人公になり、達成感･成就感を伴いながら自信を深めていっていることが分かる。演出家としての私にとって、何より嬉しい瞬間だ。

「釈迦の掌と孫悟空」の喩えは、総合以外の時間にも当然有効だ。いやむしろ、日常的にこうした学びを作れたらどんなにステキだろうと思う。今はまだ漠然としているが、「協同的学び」の１シーンにかすかな影を見いだすことがあるとだけ記しておこう。